

令和元年度 伊達市民憲章 作文コンクール受賞作品集



福島県伊達市

作品集発行にあたって

伊達市長 須田 博行

伊達市民憲章作文コンクールは、次代を担う市内の小・中学生の皆さんが、作文を通じて市民憲章の意味を捉え、自分の将来や伊達市の未来についてよく考える機会となるとともに、この作文を書くことで、ふるさとへの愛着心を育み、心豊かに成長してほしいという願いを込めて、平成二十九年度から実施しております。

伊達市民憲章は、伊達市合併十周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、市民の皆様とともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範として作られたものです。

今回は、市民憲章の一つである「そだてましよう 支えあいと思いやりの気持ち」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて四百五十三点の応募がありました。身近な体験や地域の行事に参加し感じたこと、市民憲章を通じて、自分が当たり前だと思っていたことを見直すことで、家族や地域との支えあいや思いやりの気持ちに気付いたことなど、まっすぐな視点で書き上げられた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちをより良くするために、「自分にできること」を具体的に自覚し、できる範囲で実行しようという思いが託されています。応募作品を読み、小・中学生の皆さんが、市民憲章の根本的な意義について理解し、「伊達市の未来をより良くするために、自分たちが何をするべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動いたしました。

本作品集が多くのの方々の目に触れることで、市民憲章を身近に感じ、ふるさと伊達市への愛着がより一層高まることを切に願っております。

結びに、本コンクールの実施にあたり、児童生徒の皆さんをご指導いただきました先生方、多くの作品を真剣に審査いただきました皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申し上げ、挨拶いたします。

目次

作品集発行にあたって

伊達市長

須田 博行

1

小学生の部

5

【最優秀賞】

広げよう、思いやりの心

栗野小学校 六年 八巻 拓成

【優秀賞】

みずほ団地の人々と共に

大田小学校 五年 八巻 明莉

つなげよう、未来へ

大石小学校 六年 宮崎 優誠

【優良賞】

ひーくんというそん在

保原小学校 五年 滝澤 董

当たり前を大切に

伊達小学校 六年 門馬 克弥

お年寄りに優しい市へ

掛田小学校 六年 三浦 天寧

支え合う温かい社会に

小国小学校 六年 高松 恋波

【佳作】

当たり前のことをやる

小手小学校 六年 羽賀 美月

伊達市の魅力を世界へと

石田小学校 六年 佐藤 琳

伊達市、最高！

伊達小学校 五年 吉田 蓮

支え合う月館の人々

月館小学校 六年 半澤 璃子

中学生の部

【最優秀賞】

支えあいと思いやりの職場体験

梁川中学校 二年 佐竹 芽依

【優秀賞】

目には見えない大切なもの

桃陵中学校 三年 小野紅瑠実

優しく手を差しのべて

霊山中学校 二年 須田 玲菜

【優良賞】

弟に元気をあたえる傘踊り

伊達中学校 二年 鈴木 もえ

支え合いとは

伊達市の魅力を生かすために

地域で支え合うこと

月館中学校 一年 鈴木 遥天

梁川中学校 三年 田卷 彩

伊達中学校 三年 高橋 凱翔

【佳作】

優しさ溢れる町

温かい町伊達市

私たちにできること

祭りで広がる信頼

月館中学校 三年 平林 冬羽

霊山中学校 三年 菅野 優空

松陽中学校 三年 清野 琴未

月館中学校 二年 齋藤紅友空

講評

審査委員長 高野 保夫

伊達市民憲章

34

32

小学生の部



最優秀賞

広げよう、思いやりの心

栗野小学校 六年 八巻 拓成

ぼくは、去年、保原町にある介護施設を訪ね、スタッフの方や施設で過ごす方と交流する機会がありました。この施設は、軽度の認知症や、身体の介護が必要な人に、介護や看護、リハビリテーション、栄養管理のサービスを提供しています。

ぼくが訪ねた時には、車いすに乗ったり、つえを使ったりしているお年寄りが三十人位いました。介護を必要としているお年寄りはおもったくさんいるという話を聞いて、ぼくはとてもおどろきました。スタッフの人達はいつもお年寄りのすぐ側にいて、ぼく達がお年寄りに伝えたいことを分かり易い言葉にして伝えてくれたり、ぼく達が考えたゲームでお年寄りのみなさんが楽しめるように、一緒に盛り上げてくれたりしました。他にも、食事や入浴の介助の仕事など、お年寄りの手助けをする様々な仕事をしていることを知りました。ぼくは、スタッフの人達が、お年寄りの目線に合わせて話をしたり、仲良く楽しそうに接したりしている姿を見て、スタッフの人達がお年寄りを支えているんだなと感じました。それでも、施設で働いている人達には、いろいろ大変なことがあるのだらうと思い、質問してみました。返ってきたのは意外な言葉でした。

「大変なこともあるけれど、お年寄りのうれしそうな笑顔を見たり、『ありがとう』と言われたりすると、大変なことなんてふっとんじやうんだよ。」

「わたしたちが、お年寄りから元気をもらっているんだよ。」

ぼくは、支えられていると思っていたお年寄りも、スタッフの人達を支えていることに気が付きました。介護施設を訪問して、この施設では、介護を受けている人達、そして介護する人達がお互いのことを思いやつて生活していることが分かりました。介護をする側の人達は、どういう手助けをすればお年寄りが不自由なく過ごせるのかを考えて行動していたし、介護を受ける側の人達は感謝の気持ちをもって生活していました。ぼくがお年寄りに

「何か困っていることはありませんか。」

とたずねた時、あるおじいさんが

「ここににいる人達が優しく親切にしてくれるから、何も困っていないよ。でも、自分の足で歩くことができれば、もっといいな。」

と話してくれました。足の不自由なこのおじいさんは、思うように歩くことができないことを悲しみながらも、自分を支えてくれている周りの人達の存在をありがたいと感じていることが伝わってきました。

この経験を通して、ぼくは、相手のことを思いやる気持ちから、支え合いが生まれるのではないかと思いました。支え合いが生まれると、みんなが明るく楽しい気持ちになります。笑顔あふれる伊達市になるように、思いやりの心を広げていきたいです。

優秀賞

みずほ団地の人々と共に

大田小学校 五年 八巻 明莉

わたしは、「みずほ団地」とよばれる団地に住んでいる。みずほ団地に住んでいる人はみんなやさしく、温かい人ばかりだ。団地全体が、まるで大きな家族であるように感じるところである。

みずほ団地の人たちは、私たち子どもが楽しめるような行事をたくさん考えてくれる。夏にはプール。冬にはクリスマス会。去年は埴輪や、まが玉作りなどしました。私は泳ぐことがあまり得意ではないが、みんなと行くプールはとても楽しい。また、一人ではチャレンジ出来ないようなことも、みずほ団地の人たちのおかげでできている。楽しいこと、おもしろいこと、おどろくことを、たくさん体験させてくれる。

九月に、小学校で運動会があった。私が通っている大田小学校では、小学校と地域が連けいして、合同の運動会を開いている。みずほ団地の人たちも、昨年の運動会のように、前日や、当日の早朝から準備をしてくださった。私は、みんなが手伝ってくださることが当たり前だと思っていたが、大田小学校に初めていらした先生が、

「こんなに、地域の方々が一生懸命に手伝ってくれて、学校や子どもたちを支えてくれる運動会は初めて見ました。すてきな地域ですね。」

と言っていた。私は、なんだかほこらしい気持ちになった。それと同時に、地域の人たちのこのやさしさは、他の地域では当たり前ではない、ということを知った。先生の言葉を聞き、大田地区の人たちをもっと好きになった。だからこそ、まずは、いつも私を支えてくれているみずほ団地の人たちの役に立ち、みずほ団地の人たちを支えられるような人になりたいと思った。そして、支え合いのやさしい気持ちで、私が大きくなっても、ずっと続いてほしいと思った。

昔のみずほ団地は、家が少なく、土地のほとんどが田んぼだったそう。それが、今では多くの家が建ち、たくさんの方が住んでいる。あいさつをしてくれる人、行事を計画してくれる人、分からないことがあったらやさしく教えてくれる人が大勢いる。そのみんなが、わたしを色々な形で支えてくれている。朝の早い時間でも、私たちが安全に学校へ行けるようにと、交通指導員として立ってくれている人がいたり、地区のことで様々な会議に出てくれたりする人もいる。そんなみずほ団地の人たちがいるからこそ、私は楽しく生活できているのだと気付いた。

今度はわたしが、みずほ団地に住む人の役に立ちたい。そしていつか、みずほ団地の人々だけでなく、伊達市に住む人々、福島に住む人々の役に立てたら・・・と思う。

今のわたしが出来ることを考え、行動し、これからますますみなみずほ団地のみんなと、明るく楽しく生活していきたい。

つなげよう、未来へ

大石小学校 六年 宮崎 優誠

ぼくの学校は、全校生が十六人の小さな学校です。人数が少ないので、大きな学校行事は、地域の人たちと一緒にを行っています。

運動会は、ぼくたち児童の種目以外に、PTAや地域のみなさん、卒業した中高生や入学前の小さい子どもたち、消防団など、いろいろな種目があります。運動会の日、大石地区に住むたくさんの人たちが校庭に集合するのです。競技に参加するだけではありません。ぼくたちや先生方だけでは手が足りないのです、会場や用具の準備、係の仕事などでも、たくさん協力してくれます。応援もしてくれるので、運動会がとっても盛り上がります。また、「竹生嶋流棒術」やおどりの地域の方が教えてくれて、運動会で一緒に演技します。

学習発表会は、第一部が地域のみなさんによる歌やおどりの発表で、第二部がぼくたち児童による歌や劇などの発表になっています。保護者のみなさんだけでなく、地域に住むおじいさんやおばさんたちも、毎年ぼくたちの発表を楽しみにしてくれています。

その他にも、霊山神社のお祭りであう「らんじょうのまい」や養蚕学習、だんごさしなど、たくさん活動で地域のみなさんにお世話になっています。また「見守り隊」として、毎日ぼくたちが安全に登下校できるように見守ってくれています。笑顔であいさつをし

てくれたり、声をかけてくれたりするので、とてもうれしい気持ちになります。

ぼくは今まで、地域のみなさんにたくさん支えてもらって来ました。自分の子どもや孫でもないのに、大切な時間をさいてぼくたちのためにいろいろなことをしてくれています。

ぼくたちのため、当たり前のように協力してくれる地域のみなさんは、本当にすごいと思うし、とても感謝しています。このようにぼくが思うようになったのは、六年生になってからです。六年生になってからは、自分のこと以上に下級生のことを考えて行動しなければならぬことがたくさんできました。昨年までにはなかった苦労やがまんもずい分増えました。そんな立場になってみて、地域のみなさんのすばらしさを改めて実感したのです。今まで気づかなかったことに、やっと気づくことができました。

これまで地域の方々にたくさん支えてもらったことを、今度はぼくが受けついでいきたいです。残りの小学校生活の中で、地域の人たちと積極的に協力してみなさんに楽しんでもらったり、周りの人に思いやりのある言動をしたりしていきたいです。それが、今までの先ばいたちが築き上げてきた大石小学校の伝統でもあります。地域の一員としてできることに精一杯取り組み、ぼくが卒業した後も在校生が受けついで未来につなげていってほしいです。そして、ぼくが大人になったら、自分の子どもにも大石のよさや伝統をしっかり伝えていきたいと思っています。

優良賞

ひーくんというそん在

保原小学校 五年 滝澤 董

ひーくんは、わたしのお母さんの弟で、わたしのおじさんだ。おじさんを「ひーくん」とよぶのはおかしいかもしれないけれど、わたし達はみんな、親しみをこめてそうよんでいる。ひーくんはしょうがい者で、今年の七月に三十八才になった。今はねたきりの生活を送っている。ひーくんは重いてんかんを持っていて、わたしが四才のころ、その発作を止めるために、のうの大手術をした。その結果、前よりは発作はなくなっただけで、歩くことも、ご飯を食べることも、言葉を話すこともできなくなった。

ひーくんはいつもおじいちゃんの家の一階の部屋にいる。遊びに行くとき、必ず、わたしと妹はひーくんを声をかける。

「ひーくん来たよー。」

するとひーくんは大きな目でこちらをぎょろっと見つめる。なんて思っているのかはわからないけど、多分ひーくんもあいさつをしてくれているはず。それとも、今日もうるさい二人が来たな、とか思っていたりして。

ひーくんのおなかには、胃ろうというあながある。そこに管をつないで、栄養を流す。わたしもたまにおばあちゃんのお手伝いをする。わた

しと妹がやるのは、注しや器で管にお薬を流すことだ。

「ひーくん元気になってね。」

と、わざわざ言葉には出さないけれど、そう思いながらお薬を流す。

前におばあちゃんに聞いたことがある。

「ひーくんが思っていることって、どうやってわかるの。」

ひーくんは話すことができないので、暑いとか寒いとか、そういうことも伝えられない。でもおばあちゃんは、話さなくてもひーくんが考えていることがわかる、という。

「だって、生まれた時からいっしょにいるんだもん。ひーくんのことはなんでもわかるよー。」

これはすごい。わたしは話せるけど、お母さんとは会話が合わないことがよくあるのに。でも、おばあちゃんを見ているとそれが分かるような気がする。おばあちゃんは理由なしにひーくんのことが大好きなのだ。

「ひーくんがいるからがんばれること、いっぱいあるからね。」

そうやって、ひーくんを大事にしている気持ちがある人にも伝わって、周りの人もみんなひーくんにやさしく接してくれるのだと思う。

ひーくんは、一人では生きていけない。生きていくためには、多くの人のささえがっている。病院の先生、かんごしさん、ヘルパーさん、そしておばあちゃん。いつもだれかにささえられて生きている。でもひーくんもまた、そのそん在がだれかをささえている。必要のない人なんてこの世にはいないのだと思う。人はみんなささえあって生きていくのだから。

当たり前を大切に

伊達小学校 六年 門馬 克弥

「支え合いと思いやり」この言葉を見たとき、ぼくは伊達市に住む人のためにどんなことができるのかとすぐには思いつかなかった。だから、その日から自分と伊達市の人々とのつながりを考えながら過ごしてみた。そうすると、今まで当たり前に思っていたことが、大切にしなければならぬことのように思えてきた。

まず、食べることだ。ぼくは毎日お母さんが作ってくれるごはんや給食を食べている。でも、ぼくは今まできれいな食べ物は残っていた。好きではないなら当たり前のように残していたのだ。今思うと考えられないことだと思う。食べ物は人が心をこめて作っている。一つの物を作るのに何ヶ月もかけて大切に育てるのだ。お母さんが作る料理や給食には、伊達市で育てたものがたくさん入っている。それなのにぼくは、育てた人の長い苦ろうを考えることもしなかった。そのとき、心から苦しい食べ物は克服したいと思った。そして食べ物を育ててくれる人やそれ売る人、そしてその食べ物をおいしく料理してくれるお母さんや給食センターの方々に感謝をもって食べていきたいと思う。食べ物を作っている人に直接の感謝を伝えることは難しいけれど残さず大切に食べることで、少しでも伊達市で食べ物を作る人とのつながりを大切にしていきたいと思った。

もう一つ気づいたことがある。それは、あいさつをすることだ。学校では「先大見笑」という言葉をテーマにあいさつ運動に取り組んでいる。「先に、大きな声で、相手の目を見て、笑顔であいさつをする」ということだ。ぼくはこの四つのことを意識してあいさつをしているが、ただ意識するだけで、どうして意識することが大切なのか考えたことはなかった。よく考えてみると、四つのことは、相手のためにするという共通していると思った。相手が気持ちよく感じるために、相手に笑顔で返してもらうために、「先大見笑」を意識しているのだ。気持ちのいいあいさつとはつながっていくと思う。ぼくのしたあいさつがずっとつながって、伊達市の人々をふくめ、周りの人々にあいさつの輪ができてほしい。だから、ただあいさつをするのではなく、今はあいさつの大切さやパワーを意識してあいさつをするように心がけている。

食べることとあいさつをすることはどちらも当たり前のことだ。でもその意味をよく考えてみると、そこには大切なことがたくさんつまっている。伊達市のために自分にできることと言われると、大きなことのように感じてしまう。けれど、日々の当たり前のことの中にたくさんの人が関係し合ってつながっている。ぼくは食べることとあいさつをすることを毎日大切にしながら生活していきたいと思う。当たり前のことを大切に。まずは自分にできることを精いっぱいがんばろう。

お年寄りに優しい市へ

掛田小学校 六年 三浦 天寧

私は、伊達市民憲章の「そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ち」を読んでまず思ったのは、お年寄りたちのことです。私たちの住む伊達市には、お年寄りの方がたくさんいます。支えあい、思いやりのある市をつくるには、助けのいるお年寄りに目を向けることが必要だと思ったからです。

私がお年寄りのために行うべきだと思うことは、お年寄りの伊達市内でのバス料金を無料にすることです。

なぜなら、お年寄りがバスを利用すれば、お年寄りが外出する機会が増えると思うからです。年をとると足やこしが悪くなり外出しにくい人が多いと思います。そうなると思う物などが不便な他、他の人と話せず孤立化してしまいます。さらに、のどかな伊達市はバス代が高いです。私の住んでいる霊山町も、バス代が高いと聞きました。しかし、バス代が無料になればお金の負担が減り、お年寄りの利用者が増えます。そうすれば、お年寄りも、足やこしの痛みを気にせず外出することができます。

さらに、私自身にできることもあります。それは、あいさつをすることと困っていたら声をかけることです。

お年寄りは、話しかけられたり、話をする、明るく、笑顔にな

ります。なのであいさつをすれば、相手も自分も嬉しくなると思います。さらに、お年寄りといえさつをしていけば、あいさつの輪はお年寄りだけでなく、自然とみんなに広がり、あいさつができるようになります。そうすれば、幅広い年代とコミュニケーションができるようになり、伊達市は、もつと支えあい、思いやりのある市になると思います。

もう一つの「困っていたら声をかける」をすると、お年寄りは助かり、喜んでくれると思います。私も以前、道案内をしてあげたところ、何回もお礼を言ってくれました。私もすごく嬉しかったです。これからも続けたいです。なのでみなさんも、困っている人に限らず、さまざまな人やお年寄りに、声をかけあい、支えあってほしいです。

私の住んでいる霊山町は、お年寄りがとても多く見られる町です。地域のイベントでも、お年寄りがたくさんいます。だからこそ、若い私たちの力で、お年寄りを助け、元気になっていかないといけません。地域のイベントに進んで参加し、周りの人の心を明るくしたいです。また、私の住んでいる霊山町だけではありません。保原、梁川、伊達町など伊達市全体の地域の人々が、支えあい、思いやりながら生活してほしいです。私自身も、お年寄りを明るく、そして元気にできるようにいつも思いやりをもち、支えあって生活していきたいです。私たちの力で、伊達市を、支えあい、思いやりのあるよりよい市にしていきたいと思っています。

支え合う温かい社会に

小国小学校 六年 高松 恋波

私はとても健康です。運動は苦手ですが、みんなと一緒に活動することができ、手足もちゃんと動きます。歩いたり、走ったり、口を動かしてご飯を食べたり、話をしたりすることもできます。父も母も元気です。父は体を動かす仕事をしているし、母は大好きなバレーボールを楽しんでいます。祖母は、ひざが痛いと言いますが、私と同じように歩いたり、走ったり、話をしたりすることができません。私にとってそれが当たり前のことだと思っていたので、遊びに行ったり、出かけたりした所で車イスに乗っている人や、杖をついて歩いている人などを見ると、「足が動かなくてかわいそう・・・。」

「周りの人もお世話をするなんて大変だな。」

などと思い、まるで、自分とは違う世界で生きている人達という目で見ているような気がします。

昨年の十二月、元気だった私の祖父が脳こうそくという病気になり入院しました。元気だった祖父の体は、たおれた後遺しようで、右手と左手が動かなくなり、話も上手にできなくなっていました。大好きな祖父が、自分達とは違う世界で生きている人になってしまったのです。体が不自由になり、今までの祖父とは別人のようになってしまいました。車イスや杖を使わなければ、自分で動くことができない祖父を見ると、

とてもショックで病気だということを認めたくありませんでした。そんな時母が、

「じいちゃんは、じいちゃんだよ。体もうまく動かせないし、話も上手にできなくなっちゃったけど、何も変わらないんだよ。じいちゃんが困ったことがあれば、みんなの手伝って助けてあげればいいんだよ。」

と言いました。初めは、今までと同じなわけがないじゃないか、障がいをもつて大変なことばかりじゃないかと思っていました。でも、お見舞いに行くと、祖父は今までと同じような笑顔で、自分の体が辛いのに、私のことを心配してくれていました。一人でできないことも多いけれど、少し手を貸してあげればできることがたくさんあることが分かりました。

障がいをもつ人は、かわいそう、何もできない、自分達とは違うんだ、と思っていた自分がとてもはずかしくなりました。

私が小さい頃、祖父にたくさんお世話をしてもらったり、できなかったことを助けてもらったりしていたように、今度は私が祖父のお世話をして、助けてあげたいと思います。

日本はこれから高齢化社会がどんどん進むと言われています。お年寄りや私の祖父のように体の不自由な人も増えると思います。私が別世界の人達だと思っていたように、まだまだ理解できていない若者が多いと思います。私達若者が体の不自由な人や、お年寄りについて理解し、寄りそい、一緒に支え合って温かい社会を生きていけたらいいと思います。

佳作

当たり前のことをやる

小手小学校 六年 羽賀 美月

私には、支えあいと思いやりの気持ちでやっていることが二つあります。

一つ目は、あいさつです。

家族や友達、地域の方たちにあいさつをすると、自分の心と相手の心が一つになったような気がします。あいさつが返ってくると、あいさつをした自分の心が温かくなっていくような気がします。笑顔であいさつをすると相手も笑顔になります。相手の笑顔を見ると、その人ともっと仲良しになりたいと考えるようになります。もしも、あいさつを交わした相手の声がいつもより元気がなかったら、どうすれば元気になつてもらえるかを考えたくなると思います。もしも、私のあいさつがいつもより元気がなかったら、相手はきつと心配してくれると思います。自分のことを好きになつてくれたり、大事に思ってくれたり、気にかけてくれたりする人が、周りにたくさんいたら、とてもうれしくなると思います。

伊達市のみなさんが、周りの人たちと、心が温かくなるようなあいさつを交わしていけば、お互いのことを思いやることのできる伊達市民

でいっぱいになると思います。

だから、私は、家族や友達、地域の方たちと、毎日元気いっぱいのあいさつを交わしていきたいです。

二つ目は、相手の気持ちを考えて行動することです。

私は、同じクラスの友達と話す時、自分の言葉で相手のことを傷つけていないかを考えて話すようにしています。自分の心が友達の言葉で傷つけられるのはいやだから、私も気をつけて話すように、心がけています。下級生の困っている姿を見たら、進んで声をかけて、助けています。私も低学年の時に上級生に助けてもらつてとてもうれしかったです。で、自分も、下級生の力になればと思い、積極的に声をかけています。学校のトイレのスリッパそろえもやっています。私のあとにスリッパを使うだれかのために、必ずそろえています。これは、一年生の時からずっと続けています。私も、だれかがそろえてくれたスリッパを見ると、気持ちよく使うことができます。だれかが、私のそろえたスリッパを見て、気持ちよく使ってくれて、またきちんとそろえてくれたら、とてもうれしいです。

私が、支えあいと思いやりの気持ちでやっている二つのことを書きました。でも、これらは、特別なことではないと気がきました。あいさつも、相手の気持ちを考えて行動することも、当たり前のことです。

当たり前のことを当たり前にやる――そうすれば、すてきな家族、すてきな学校、すてきな伊達市になると思います。だから私は、当たり前前のことを当たり前にできる人になりたいです。

伊達市の魅力を世界へと

石田小学校 六年 佐藤 琳

みなさんは、「支え合う」ということを常に考えていますか。広い広いこの地球の中のたくさんの人たちの中の一人として、私たちは今、生きています。人と人が支え合っているから、いい暮らしができているのです。ここ伊達市でも、市民のみんなが支え合って暮らしています。私の住んでいる石田でも「石田子クラブ」や「鈴嶽神社秋季例大祭のらんじょう神楽」など、子どもたちが地域の人たちと結び付きが深くなるように、たくさんイベントを毎年行ってくれています。

特に、「鈴嶽神社秋季例大祭のらんじょう神楽」では、地域のおじいさんがやさしく教えてくれて、とても分かりやすかったです。本番では、石田の中瀬通りを地域の人たちに見せながらおどりました。終わった後、地域の人に、

「上手だったよ。」

と言われて、うれしかったです。

また、石田のお年寄りの方は、いつも優しくわたしたちに接してくださいます。

「ああ、○○のこの孫か。」

と家族ぐるみで分かってくれています。それに、

「おはよう。」

「何年生だい。」

と、いつでも気軽に声をかけてくださることが何よりうれしいです。まるで石田に住んでいる人たちみんなを家族だと思っているかのようです。このように、私の暮らしている石田では、明るく、楽しく暮らすために一生懸命努力し、支え合っています。

しかし、今、伊達市は、人口が減少しています。私は、どうにか人が増えないかなあと考えました。伊達市には、たくさん魅力があります。あんぽ柿、桃などおいしい食べ物がたくさんあるし、自然もたくさんあります。確かに都会には、職場や遊び場がたくさんあります。でも、息ぬきをしたときは福島県に、そして、伊達市に来てほしいです。そして伊達市の魅力を知って、みんなに伝えてほしいです。

私ができることとしては、いきなり伊達市全体は難しいので、まず自分の住んでいる石田から大石や小国の地域にまで、支え合いの輪を広げていきたいと思います。大石小・小国小の子たちとは、去年と今年の二年間、三校合同の宿泊学習で一緒に活動しており、お互い協力し合ってきました。これから、もっと支え合う場面がつかれるように私からも働きかけていき、ゆくゆくは伊達市へ、そして世界へと広げていきたいと思っています。

生きる、暮らすということは大変だけど、ここ伊達市で、地域の人と楽しく、明るく暮らせることは、とても幸せなことです。人と人が共に支え合い、よりよい活力のある伊達市をつくり、私が大好きな伊達市を、世界中の人が知って、大好きになってほしいです。

伊達市、最高！

伊達小学校 五年 吉田 蓮

ぼくが住むこの伊達市には、伝統あるお祭りや行事がたくさんある。この夏休み、ぼくはそれらのいくつかに参加した。参加するたびに、いろいろな思いに気づかせてくれる。

まずは、伊達町がほこる伝統的なお祭り、長岡天王祭だ。そこでぼくは二つの光景を目にした。その日はあいにく雨がふり、山車が運行できそうになかった。空を見上げては何もすることなく、ボーッとしていたぼくたちの目の前で、大人の人たちがすばやく集まって、ビニールシートを手ぎわよくかぶせているではないか。自分よりも山車の方が大切だと言わんばかりに、みんなで協力して山車の世話をしているのだ。そして祭りが終わり、他の方部の人たちとすれちがうたびに、必ずお礼を言い合っては「来年もよろしくおねがいします。バイバイ。」と、また会う約束をしていた。こうしてみんなの協力の下、伝統が引き継がれていくんだなあ、そして、多くの人が「ふるさと伊達」をととても愛しているんだなあと感じた。

伊達マルシェでは、祖父が経営するまるよし食堂を手伝った。伊達マルシェとは、地域商店街のにぎわいを目的に始まったイベントだ。ぼくたち家族は、キャベツをご飯の上のにせたり、漬け物をわきに入れたりする仕事をした。孫のぼくがいうのも何だが、祖父のつくるカツ丼は天下一品

の味だ。買いに来られたお客さんに、ぼくも一言、

「ありがとうございます。また来てくださるのを楽しみにしています。」と声をかけてみた。すると

「去年も来たのよ。あんまりおいしかったから、売り切れないうちに先に買おうと思って。買えてよかったあ。」

と笑顔で話してくれた女性の方がいた。ぼくもうれしくて、心がほおつと温かくなった。

保原町で行われた「ものの里マラソン大会」でも、ぼくはたくさんさんの温かさにふれることができた。熱中症予防のためにと、氷を用意してくれたり、沿道からは、

「がんばれー、ガンバレ。あともう少してゴールだぞ。」

とはげましてくれたりして、力を与えてくれるのだった。ゴールしたぼくに、

「ごくろうさまでした。よくがんばったね。」

と温かい言葉をかけてくれたりもした。つかれも一気に吹っ飛ぶくらい、すがすがしい思いでいっぱいだった。

今年ぼくは積極的に参加したことで、多くの市民の思いに直にふれることができた。なぜ伊達市では赤ちゃんからお年寄り、外国人までが、気持ちよく快適に生活できるのか、分かった気がする。それは、昔から受け継がれてきた、人を思う心の温かさがあるからなのではないだろうか。ぼくたち子ども世代も、支え合いと思いやりの気持ちを常に持ち続けさらに光かがやく伊達市にしていきたい。

支え合う月館の人々

月館小学校 六年 半澤 璃子

わたしの住んでいる月館町には、赤ちゃんからお年よりまで、様々な年代の人々が住んでいます。そんな月館町の人々は、とても仲がよいと思います。

わたしは、なぜ月館町の人々がそんなに仲がよいのか、考えてみると、二つの理由が考えられました。

一つ目は、子どもたちと地域の方々の交流の場が多いということです。月館町には、様々な行事があります。

夏には流しそうめんや夏祭り、秋には運動会、冬にはクリスマス会と、季節ごとの行事があります。

また、月に一回、月館中央交流館では「お話の会」があり、地域の方が、絵本の読み聞かせをしてくださいます。お話の会の後にはちょっとした工作や料理をすることもあります。

このような様々な行事があることで、地域の人たちの交流が深まり、仲がよくなるのではないかと思います。

二つ目は、「ぼっこカフェ」です。役場に「ぼっこカフェ」というカフェがあります。そこでは、地域の方がジュースを出してくださいます。また、小物入れやカバンを作ることもできます。

そんなぼっこカフェに、わたしは、友だちと一緒によく行きます。

地域の方とのおしゃべりがとても楽しいです。

ぼっこカフェでは、わたしの祖母も働いています。祖母は、こんなことを言っていました。

「ぼっこカフェで働いていると、たくさんの人とおしゃべりができて楽しい。」

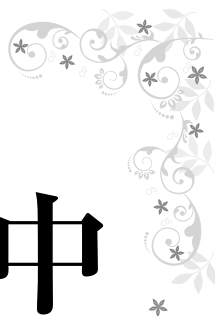
その言葉を聞いて、ぼっこカフェはそこに来る人はもちろん、働いている人も楽しんでいるんだと感じました。

あらたまった行事とかではなく、日常的に地域の人々が交流できる場所があることは、とても素敵だと思います。

このように、月館町には、地域の人々が交流できる様々な行事と場所があります。たくさん交流があることで、お互いが協力し合い、支え合って、みんな仲がよい月館町があるのではないかと思います。

わたしも積極的に様々な行事に参加して、地域の方々との交流を深めたいと思います。そして、笑顔あふれる月館町にしていきたいと思っています。

中学生の部



最優秀賞

支えあいと思いやりの職場体験

梁川中学校 二年 佐竹 芽依

私の両親は「地域の人たちを支える」という言葉を絵に描いたような仕事をしています。

父は会社員のかたわら、伊達市の消防団員を長く務めています。平常時は会社の通常業務をこなしながら、災害から地域住民を守るための広報活動や地域の防災指導を行い、災害時には自宅や職場から現場へ駆けつけ、地域での経験を活かした消火活動や地域住民の救助活動を行っています。

母は、伊達市内の病院で看護師を長く勤めています。入院患者さんの食事や入浴の補助をして、患者さんやそのご家族の方の助けとなる業務を行っています。他にも患者さん本人とのコミュニケーションや、そのご家族への説明や聞き取り、ミーティングや研修会への参加、後輩への指導、時には深夜勤務でのナースコールへの対応と、地域住民の方々の回復を手伝ったりケアをしたりという、多岐にわたる仕事をしています。私が将来、地域のためになる仕事に就きたいと思うようになったのは、そんな両親を見て育ったからかもしれません。

私は、中学校の職場体験で、体験先を伊達市の北福島医療センター

に決めました。その理由は、亡くなった祖母が生前の入院治療で北福島医療センターに大変お世話になったこと、そして、そんな祖母の入院治療を目の当たりにして、私が将来、地域医療の職種を強く希望するようになったからです。

職場体験を通じて私が特に感じたことは、とにかく何においても、看護師さんたちが患者さんを最優先に仕事をしているということでした。「ベットのシーツがほんの少しずれているだけでも、患者さんが転倒して怪我をしてしまうおそれがある」というお話をお聞きして看護師の方それぞれが、どんなふうに対応すれば患者さんのためになるのかを一番に考えて仕事をされている、ということを感じました。患者さんと同じ目線になってそれぞれの方と触れ合いながら仕事をされていて、看護師という仕事を身近に感じられる職場体験でした。

自分の地元病院での医療現場の生の声は、本当に貴重な体験となりました。地域医療には、地域の方々との触れ合い、チームワークそしてコミュニケーションが大事なのだということを痛感しました。

「そだてましよう、支えあいと思いやりの気持ち」という伊達市民憲章は、さまざまな年代の方が居住し、特に高齢化が進み要介護認定者数や要介護認定率が上昇傾向にある伊達市には、非常に重要な意味のある憲章だと感じます。

私は、将来の夢を叶えて地域医療の仕事に就くことで、支えあいと思いやりの気持ちで地域のために少しでも役に立てればいいと考えています。

優秀賞

目には見えない大切なもの

桃陵中学校 三年 小野 紅瑠実

私達の住む伊達市には、小さい子供からお年よりの方まで、様々な人が住んでいます。そんな伊達市では、たくさんの行事が行われています。夏になると、色々な場所で夏祭りが開催されます。また、私の住んでいる保原町では毎年、「伊達ももの里マラソン」が開催され、多くの人が参加しています。

なぜ、伊達市では毎年様々な行事が開催されるのか。私は、その大きな理由は、「地域の人の支え合いの気持ち」だと思います。実際、私も「伊達ももの里マラソン」のボランティアをしたり、地域の祭りへ行ったりしていますが、地域の人が年代を問わず参加をしていることで毎年開催されているのだと思います。地域の行事に積極的に参加するという支え合いの気持ちがあるからこそ今まで続けられたんだと思います。また、積極的に参加することで、伊達市の地域の方の思いやりの心も感じる事ができます。マラソンの時などは、太鼓を使って走っている人へ応援をしたり、笑顔で水を渡したりして、走り終わる時には、参加者の方も笑顔になっていて、とても絆が深まる行事だと思います。また、学校へ行く時や遊びに行

く時、地域の方に会うと、元気に「いつてらっしゃい」と声をかけていただき、帰りも「おかえり」と言ってくださるので、そういう日常でも、地域の方に支えられて過ごしているんだと感じます。

このように、私達はいつも地域の人に支えられ、時に私達が支えながら生活をしています。小さい子供から大人の方、お年よりまで様々な年代の方が住んでいる伊達市ですが、年齢の壁を越えて、支え合い、思いやりの心を持って人と接しながら生活をしています。私達のような学生が毎日学校へ行けるのも、いろいろな経験ができるのも、伊達市の支え合いの力のおかげだと思います。そうやって、たくさん経験から多くの事を学び、新しい知識を身につけてきました。また、地域の方々からの温かい気持ちや、私達への思いやりの心を日々、感じてきました。その目には見えないけど、何よりも大切な事も自分の周りの人から教えていただきました。これらの私達にできることは、この伊達市という恵まれた環境の中でたくさん経験した事、これからの経験で学んだことを次の世代へと繋いでいくことや、地域の方からいただいた思いやりの心を、次は私達が伝えていく事だと思います。私達が大人になり、お年よりになっても、今のように笑顔、そして支え合いと思いやりの心を持ってみんなが過ごしている、そんな伊達市にしていけたらと思います。

優しく手を差しのべて

靈山中学校 二年 須田 玲菜

目を閉じると目の前は何も見えなくなって恐怖感が増し、自由が奪われたようだ。また耳をふさぐと周りの音や人々の声が聞こえなくなり、恐怖感に襲われる。そう、私達健常者にとって障がい者の抱えている気持ちは全て理解しているかと聞かれたら自信をもって返事することはできない。だから、健常者は障がい者の気持ちを考えて生活してみなさいと言われたらとても難しいことだ。でも、障がい者の気持ちを考えるとという小さなことであつてもその人にとってありがたいと思つてもらえるのではないだろうか。たったそれだけの小さなことでも人々は助け合つていると私は思う。伊達市も小さなことからたくさんの人々を助け合えるそんな市になつてほしいと私は思う。

私の通う学校では七月に職業体験があり、私は病院と介護施設に行つてきた。その中でも私が印象に残つていゝのは寝たきりの人、車椅子に座つて生活している人など、自分が生活していくなかでほとんどが初めての体験だった。施設で生活している人達は、誰かの手を借りなくては生活できない人がほとんどだった。それでも年代の違つた介護士の方々は、笑顔で自分の家族のように接していた。私はその姿をみてかつこいいと強く感じた。そして、人々は年代は

違えど助け合つて生活できることを職業体験を通して感じる事ができた。

私の家族には祖父と祖母がいて一緒に暮らしている。今はとても元気で体を動かしているが、いつかは施設で会つた方々のように寝たきりになったり、車椅子に乗るようになったりすることもあるかもしれない。だからこそ、今は助けてもらつてばかりの祖父や祖母に恩返しができる人になりたい。そして、祖父と祖母に「ありがとう。」

と、言葉をかけてもらつても、もしかしてそうでないとしても、積極的に人を助けられる人間になりたいと思う。

人間という生き物は、一人では生きてはいけない。だからこそ、年代が違う人や家族ではない人でも優しく手を差しのべられるのではないかと思う。東日本大震災の時、私はまだ年中だった。でもその時のことを、鮮明に覚えている。地震や津波で亡くなつた人々がたくさんいる中で、生き残つた人々が避難所で助け合つていゝ姿をテレビで見た。それが自分の身におきた中で一番の出来事で、助け合つていゝ姿を直接見た瞬間だった。

私が今まで歩んできた人生の中で経験したことはとても貴重なことだった。そのことを生かして人の役に立てるようになって、伊達市もよくなつていゝてほしいと思う。

優良賞

弟に元気をあたえる傘踊り

伊達中学校 二年 鈴木 もえ

私の家族は、曾祖母、祖父母、父母、姉、私、そして弟の八人家族です。祖父母は農作業をしていて、私も手伝いますが、祖父母の方が手際よく、とてもかきません。正月には、うすで餅をつき、たくさんのお客が来くれます。昔からの伝統を大切にしていって、家族みんな仲がいいです。

そんな中で、いつも中心にいるのが、幼稚園生の弟です。弟は体が小さく、病気もあるので、生まれたときから苦労する事がたくさんありました。家族で仲良く助け合っているのです、今、弟は毎日とても元気に過ごしています。弟が、元気でいられるのは、家族や幼稚園の先生、地域の方々など、たくさんの方の支えがあるからだと思います。幼稚園では、先生方が、弟が同級生の人々と同じく遊ぶことができるようにいつも見守ってくれています。地域の方々も、何か行事があるごとに、参加している弟をいつも気に掛けてくださり、弟が楽しく活動できるように配慮してくれています。

いろんな行事の中で、弟が一番楽しみにしているのが、地区のお祭りです。子どもたちが「傘踊り」を発表するのです。「傘踊り」は、

私も小さい時から参加していて、地域の子どもたちは、お祭りで発表するために、一ヶ月ほど前から練習します。弟はまだ幼いため、練習にしか参加することができませんが、傘踊り用の傘を渡されると、とても楽しそうに子どもたちの踊りを見ながら踊るまねをしています。そのとき、傘踊りの歌を担当している祖父も、弟を見ながら嬉しそうに歌っています。私も嬉しそうな弟を見ると元気が出るような気がします。たくさん苦労することはあるけれど、やっぱり弟がいてよかったなと思います。弟は、練習に休まず参加していて、まだはつきりと話すことはできないけれど、自分の中で精一杯踊っていました。

そして、練習の時期が終わり、お祭り本番。本番では、神社や地域の人の家などの場所を回らなければいけないので、子どもたちが山車を引っ張りながら移動します。山車を引くときには、弟もついて歩きました。長い距離を歩くので、弟は疲れているようでしたが、演奏の笛や太鼓の音を聞いて、お祭りを楽しみながら頑張って歩いています。地域の方にも励ましてもらいました。

その姿を見て、昔から続いている「傘踊り」には、弟を元気で活発にする力があると思いました。そして、弟が笑顔になると、周囲の大人の方も温かい笑顔を弟に向けてくれることに気づきました。これからは弟には他の人と同じ環境で楽しく過ごし、成長してほしいと思っています。そのためにも、家族や、「傘踊り」をはじめとする地域の伝統をこれからもずっと大切に、自分自身も弟を支えられるよう、成長していきたいです。

支え合いとは

月館中学校 一年 鈴木 遙天

「そだてましょう 支え合いと思いやりの気持ちを」

この市民憲章を聞いた時に僕が思ったことは、

「僕は今までだれかを支えたり、思いやりのある行動を取ったりしていただろうか。」

ということだ。逆に支えてくれている人はたくさんいると思った。

まず一番は家族だ。父母、祖父母は、僕が生活していく中で、朝起きて夜寝るまでさまざまな場面で支えてくれている。

次は、地域の方々だ。僕は、小学生の時は徒歩、中学生になってからは自転車で通学している。バイパスの交差点には毎朝、僕たちが安全に渡れるように交通安全協会の方が立ってくれている。また毎月一日、十五日には、地域の方があちこちの横断歩道で見守ってくれている。僕たちが安全に通学できるように支えてくれているのだ。

では、これらのことに感謝し、僕が返せることは何だろう。何かできる行動はないだろうか。

支え合うということは、支える、支えられる、という一方的なものではなく、おたがいにコミュニケーションを取らないとできないものだと思う。コミュニケーションを取る中で相手がどのように思

い、自分はどう思い、どうすればいいのかわかってくる。それが思いやりにつながるのではないのかと思う。

僕が考えたことは、次のようなことだ。少子高齢化が進んでいる伊達市は、高齢者だけの家も多い。そこで市内の中高生などで、高齢者と交流する、もし困っていることがあればお手伝いをする、というものだ。雪が多く降る地域で、中高生が高齢者の家に行って雪かきを手伝ったりするというニュースを見たことがある。伊達市内では、大雪はほとんど降らないので、例えば簡単な農作業の手伝いをしたり、困っていることがなくてもおしゃべりをしたり、お茶を飲んだりするのもいいと思う。

「伊達市内で」と大きく言うと、難しく感じるが、一人一人が、近所のお年寄りと交流するのだと考えると、すぐく大変で難しいことではないんだなとふと思った。

僕は今まで、支えられてばかりで、僕の方からアクションを起こさなかった。だから、これからは、僕の方から一歩ふみこんで、家族や地域の方々と支え合っていけたらいいと思う。

僕は、どんな人にも優しく、そして支えられるような大人になりたい。そして、これからも、明るくて元気なあふれる伊達市であるよう協力する人の一人でありたい。

伊達市の魅力を生かすために

梁川中学校 三年 田巻 彩

私は伊達市に住んでみて支えあいを感じたことが何度もありました。どんな時にそう思うかというと、道が分からない時に聞くとやさしく丁寧に教えてくれたり、横断歩道を渡る時も車と人がお互いにゆずりあいのある行動をしたりする時です。周りから見たらあたり前のような気がしますが、あたり前には必ず思いやりや支えあいがあるといます。伊達市では事故はほとんど起きません。車も人も相手に思いやりを持っているので車と人の事故が少なくて。事故が少ないとケガをする人も悲しむ人も少なくなります。これは私達が明るく生きるために重要なことです。

伊達市では、夏祭りや秋のふるさと祭りなどが行われますが、たくさんの方々の協力があってこそできるものです。お店の皆さん達のためにおいしいものを作ってくれたり、他の所からもお客さんが来てもらえるようにと宣伝をしたりしています。祭りを楽しくするには協力が必要です。なぜ伊達市ではこんなにたくさんの人達が協力してくれるのでしょうか。それはあいさつだと思っています。私が朝、学校へ行く時には、地域の方や見守り隊の方が、「おはよう。」と「いつてらっしゃい。」や「気をつけてね。」と笑顔であいさつしてくれるので、私も笑顔で「おはようございます。」とあいさつができます。

朝のこのあいさつがすごく大切だと思います。私は、自分からあいさつをするようになりました。あいさつの大切さを知ってから、すすんで自分からあいさつしようと思い、自分からあいさつができるようになりました。人と人がコミュニケーションをとることが地域の活性につながると思うので、あいさつは欠かさずに続けていきたいと思っています。

困ったことがあったら助け合える、支え合える伊達市は私達の誇りではないでしょうか。この伊達市のあいさつや思いやりがもっと増えればたくさんの人達が笑顔で住みやすい市になると思います。果物も魅力ですが、思いやりも負けないくらいの魅力があります。目には見えない魅力は心で感じるができます。その二つの魅力が、人と人との支えあいや居心地のいい市を作り出していると思うので、これからも大切にしていくべきだと思います。

伊達市民憲章に込められた思いが実現できたら、他の魅力を感じることができるようではないでしょうか。そして、これを行動に移していくのは私達です。小さい子からお年寄りまでが、気持ちよく過ごせるための工夫をしていきたいと思っています。私達一人一人の行動も大切ですが、協力することも必要です。これからの伊達市が、よりよいものになっていくように行動していきたいと思っています。

地域で支え合うこと

伊達中学校 三年 高橋 凱翔

僕の祖父母は農業を営んでいる。主に自家用の果物が中心で、さくらんぼや桃を育てている。幼い頃から食べているが、どれも格別に美味しい。その中で出荷もしているものは桃だ。

祖父母の家の畑には、四十本近くの桃の木がある。一年を通して、木の消毒や剪定など様々な作業があるが、収穫から出荷までの時期の七月下旬から八月中旬までが最も忙しい。収穫した桃を出荷する直前には、箱詰めといって、箱を作り、その後桃に傷がないか一つ一つ確認し、箱に詰めていく作業がある。その際、消費者に届くまでを考えながら硬さも確認し見極めて選別する。それは途方も無い量で、僕も何度か手伝ったことがあるが、真夏の暑い外での作業はとても大変だった。そんな中、朝早くから淡々と作業をしている祖父母は凄いと思う。今年の夏も、

「夏休み、時間があつたら手伝いにきてな。」

と祖父から言われた。僕は、小学校高学年頃から桃を詰める箱作りを任されていたので、今年も何度か手伝いをした。母や弟も、それぞれ分担してできる手伝いをした。家族が協力し支え合うことで、祖父母の負担は減るのだ。

ただ、祖父はそろそろ高齢で農業をするのが大変だと言っていた。

これからどうしていかかが課題なのだ。そして、家族で農業を続けていくとしても厳しい部分が多い。また、伊達市には祖父母の育てている桃などの果物の他にも野菜や地鶏、工芸品など多くの特産物があり、これらも同じような課題があると思う。このような状況は伊達市に、多くあるのではないだろうか。

僕は、伊達市の美味しい果物や野菜が無くなってほしくない。しかし、高齢者が増え、若い世代の人が減っているのが現状だ。僕が祖父母の仕事を手伝ったことは美味しい桃の生産に少しだけ貢献できたのではないと思う。だから、昔からの知識や伝統を高齢者の方々から受け継ぎ、若い世代の人達が持つ新しい考え方や方法を取り入れ、これからの時代に合うかたちで続けていき、支え合うことが大切だと思う。そうすれば、この先時代が変化しても今までの伝統や考え方を残すことができると思う。

僕はまだ、身近な所からの支え合いぐらいしかできないけれど、さらに家族から学校、ご近所の方々へと支え合いの心を広げていきたいと思う。これから僕自身が大人の方から今までの伝統を学び、地域でおこなわれている活動に参加し、次の世代に受け継いでいくようにがんばっていければと思う。

支え合うことや思いやりの心を持つことが、地域が活気づくことだけでなく、地域の伝統や、特産品を守っていくことにつながっていくのだと思う。

佳作

優しき溢れる町

月館中学校 三年 平林 冬羽

私の住む月館町では、支え合いや思いやりの気持ちがとても感じられます。

その理由は、町の人皆がとても優しいからです。毎朝、私は車で学校に通っています。学校までの間、必ずバイパスを通るのですが、その途中にある横断歩道の所にいつも立って子供達の登校を見守ってくださっているおじさんを見かけます。そのおじさんはいつも気軽に声をかけてくださって私がお世話になっている方なのですが、毎日朝早く、自分の家からバイパスの横断歩道の所まで歩いて来てくれます。暑くても雨が降っていても、小学生や中学生をいつも笑顔で見守っていてくれます。私が車で通る時もいつもおじぎをしてくださるので、改めて本当に素敵な方だと思いました。

他にも町の中にあるお店に行くと、店員の方が笑顔で声をかけてくださいます。顔見知りだからこそ、ちょっとした世間話などで楽しく会話することが出来ます。

町の人達は、道ですれ違うときは必ず挨拶してくれます。私は、学校から帰る時に公民館で家の人の迎えを待っているのですが、そ

の公民館で働いている方がいつも学校から帰ってくると、

「おかえりなさい。」

とまるで家族のように笑顔で迎えてくれます。その言葉を聞くと、私達を温かく見守ってくださっているのだといつも嬉しく思います。

私は小さい頃、人見知りで町の人に自分からあまり話しかけたことがありませんでした。そんな私を町の人達はいつも笑わせてくれようとたくさん話しかけてくださったことを覚えています。子供の頃に子供会で行ったデイズニ一の旅行では、行きのバスで酔ってしまった私を大人の方が席を移動して世話をしてくださいました。その時、世話をしてくださった方が朝、バイパスに立ってくださいているおじさんでした。その時のことを思い出すと本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

そんな優しい人の多い月館町ですが、だんだん人口が減っています。そのため、若い人が減り、活気がなくなっています。ですから町に活気を取り戻すために私は出来ることをしていきたいと思います。現在は自分から積極的に挨拶するなどしていますが、他にも町の行事やボランティア活動に積極的に参加して、この町の人の優しさや温かさを伝えていける人になりたいです。

温かい町伊達市

霊山中学校 三年 菅野 優空

僕は、中学校に入学した時に、伊達市民憲章を知りました。五つの憲章の中で一番心にひびいたのが「そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ち」です。支えあいや、思いやりという言葉は、小さな頃から、小学校の時も、今現在も家族や先生方、周りからよく耳にしていますが、それは具体的にどのようなことなのでしょうか。

平成二十三年に、東日本大震災と、原発事故が起きました。僕の住んでいる伊達市でも家屋の倒壊や、土砂崩れ、そして電気・ガス・水道などのライフラインが止まってしまい、命の危機を感じる経験をしました。あの時から今日までの八年間、伊達市民が心をひとつにして、復興にそれぞれの立場で携わってきました。僕は当時、まだ小学生でしたが、家族はもちろん。近所の方や、地域の方と、みんなで共に助け合い、協力し合って、長い間生活していたことを鮮明に覚えています。それを見てきた僕は、とても感動したし、「伊達市はやっぱりすごいな。」と思いました。市民みんなが支えあいと思いやりの気持ちにあふれていたから、お互いに、助け合い、協力しあったから、さまざまな困難を乗り越えられたのだと実感しています。

もう一つは、僕が住んでいる地域の小中学生のバス通学で感じていることです。そのバス停には、毎朝見守り隊のおじさんや、旗一番のお父さんやお母さんが、雨の日も風の日も雪の日も、必ず僕達が安全に登校できるように見守ってくれています。僕が「おはようございます。」とあいさつすると、いつもの笑顔で「おはよう、いつてらっしゃい。」「気を付けてな。」「がんばってね。」などと、優しく声を掛けてくれます。その温かい言葉で、今日も一日がんばろうと思えて、ありがたい気持ちでいっぱいになります。僕たちは、温かい心の人たちに、守られています。そんな人達が沢山いるこの伊達市は、とても温かい町だと思いました。僕たちは、これからも支え合いと思いやりの気持ちを持ち、笑顔あふれる伊達市にしていきたいと思いました。

私たちにできること

松陽中学校 三年 清野 琴末

私はこの作文を書くにあたって考えたことがあります。それは、「お年寄りの方のためにできることはなんだろう」ということです。

今、私が住んでいる伊達市にはたくさんのお年寄りの方がいると思います。スーパーへ買い物へ行っても、病院へ行っても子供の数は少ないと感じることが多いです。また、私は祖父、祖母と一緒に暮らしているので、人一倍お年寄りとの関わりがあります。まず私たちはどんなことをしていたいているのか考えてみました。すると、交通指導、登下校中のあいさつ、私の祖母は夕食を作ってくれて、祖父は塾への送り迎えもしてくれているので、数えるときりがありません。しかし、私たちがお年寄りの方に行っていることはなんでしょう。あいさつを返したり、交通指導の方の前を通るだけだったり、どちらかといえば受け身の姿勢になってしまっているのではないのでしょうか。

そこで私が考えたお年寄りの方のためにできることは「自分から声をかける」ということです。いつも何かをしてもらうだけでなく、自分たちから何かをするように変わらなければならぬと考えました。例えば、自分からあいさつをしたり、重い物を持っている人がいたら、「お手伝いしますか」と声をかけたり、誰にでもできるこ

とだと思います。でも、私もやってみようとは思いますが、なかなか緊張して声をかけることができませんでした。しかし、友達と一緒にのときなら、自分からあいさつすることができました。一人ではできなくても、二人、三人いればできることも多いはずです。大切なことは「やってみよう」という気持ちだと思いました。

もし、「自分から声をかけること」を多くの人ができるようになったら、お年寄りの方たちにとっても喜んでもらえるはずです。そして、私たちは支えていただくだけでなく、私たちがお年寄りの人を支えることもできると思います。いろんな世代の人が住んでいるからこそ、足りないところを補い合って、助け合うことを意識したら、みんなが明るく楽しい生活ができると思います。そんな伊達市になったらとても素敵ではないでしょうか。

祭りで広がる信頼

月館中学校 二年 齋藤 紅友空

月館町では夏になると祭りが開催されます。

それは、「小手姫の里夏祭り」です。この祭りは、毎年お盆に行われ、月館町の人はほぼ全員が参加し、屋台もたくさん出ていて、月館町の大きな行事の一つです。

この祭りのイベントは四つあります。

一つ目は、「女神太鼓疾風」による太鼓の演奏です。「女神太鼓疾風」とは、月館町の太鼓保存会で、伊達市の各町の太鼓保存会の一つです。私や私の父も所属していて、町の人どうしで協力してやっています。月館町内の他の団体の太鼓保存会も祭りでは一緒に演奏しています。最後の方になってくると、太鼓のリズムもはやくなり、盛り上がってきます。太鼓のたたき手ではない方々も一緒になって太鼓のかけ声をかけて盛り上がっています。

二つ目は、盆踊りです。太鼓の演奏をしているまわりに円をかいで、みんなで踊ります。仮装をしている人や、浴衣を着ている子供なども踊っています。盆踊りが終わると、仮装賞やかわいいで賞などがもらえることもあります。

三つ目は、灯籠流しです。太鼓や盆踊りが終わって少し静かになったときに、広瀬川に灯籠が流されます。暗い川に光る灯籠がとても

きれいです。

四つ目は、花火です。アナウンスが流れ、会場の人たちが空を見上げると、ドンッと大きな花火が打ち上がります。町の祭りなので、花火の規模が小さいと思われがちですが、実際は、大きくて、たくさん花火が打ちあげられます。

この祭りがあるのは、町の人の支えがあるからです。なぜ町の人がんばっているのでしょうか。その理由は二つあります。一つ目は自分も楽しみ、町内外の人にも楽しめたいからです。まず自分が楽しまないと、町内外の人たちも楽しめないと思います。私の所属している太鼓保存会の方たちに話を聞きました。すると、自分が子供のときに楽しかったから、大人になって今度は自分が楽しめたいという気持ちでやっているそうです。二つ目は町内に集まり、一つのことを成し遂げることが絆につながるからです。普段ちがう仕事をしている方たちも集合して一致団結することで地域の絆が深まります。

しかし、一つ問題があります。それは、この祭りの規模がどんどん小さくなってきていることです。以前は、太鼓のやぐらが外にあり、屋台が校庭のはじまであったのですが、やぐらが体育館の中になり、屋台も今までの半分になってしまいました。

祭りがなくならないためにも、祭りで培った支え合い、思いやりの心を、次の世代に受けついでいきたいです。

講 評

審査委員長 高野 保夫（伊達市教育委員）

伊達市の市民憲章作文コンクールも今年で三回目を迎えました。今回は市民憲章の第三文「そだてましよう 支えあい」と思いやりの気持ち」という課題でした。各学校の協力もあり、作品数は小学五・六年生と中学生を合わせて四百五十三点となり、応募総数は昨年より四十二点も伸びました。それらの中から、各学校から推薦のあった三十九点が最終段階の第二次審査に残り、主題のとらえ方、作文の表現力などの観点から慎重に審査が行われました。その結果、最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作の各賞が決まり、合計して二十二名の皆さんが見事に受賞されました。

まず、最優秀賞に決定したのは、小学生部門では、栗野小六年の八巻拓成さんの「広げよう、思いやりの心」、中学生部門では、梁川中二年の佐竹芽依さんの「支えあい」と思いやりの職場体験」の二つの作品でした。八巻さんの作文は、介護施設を訪問したときの利用者の皆さんとの交流を通して、「支えあい」から「思いやり」が生まれることに気づき、自分の考えが深まったことを書いています。また、中学生の佐竹さんの文章は、将来の職業観を育てる教育の一環として行われている職場体験を踏まえ、医療の現場で感じた人々の協力体制や支え合うことの大切さについて、中学生らしい文章表

現で手堅くまとめています。

次に、優秀賞を受賞したのは、小学生部門では「みずほ団地の人々と共に」（大田小五年 八巻明莉）、「つなげよう、未来へ」（大石小六年 宮崎優誠）の二つの作品です。いずれも自分の住む地域や学校での出来事に中心をしぼり、地域の活動への参加を通し、多くの人々に支えられていることに気づき、自分も将来地域の役に立ちたいという決意を述べています。また、中学生部門では、「目には見えない大切なもの」（桃陵中三年 小野紅瑠実）、「優しく手を差しのべて」（霊山中二年 須田玲菜）の二作品です。小野さんは、伊達市のさまざまな行事に触れ、地域の人々の関わりや協力体制、あるいは思いやりの心がそれらを支えていることを確認し、伊達市の将来もそうであってほしいと述べ、須田さんは、自らの職場体験での経験を通して、障がい者を支える介護の大変さや協力して生活することの大切さなどについて、自分のこととして受け止めようとしている作品です。

続いて、優良賞の八つの作品について。「ひーくんというそん在」（保原小五年 滝澤董）、「当たり前を大切に」（伊達小六年 門馬克弥）、「お年寄りに優しい市へ」（掛田小六年 三浦天寧）、「支え合う温かい社会に」（小国小六年 高松恋波）という四つは、小学生部門の作品です。障がいを持つ家族のことに焦点を当て、関係者の支え合いや地域社会とのつながりの問題を考えようとしているのは滝澤さんと高松さんの二作品です。食べ物とあいさつという視点から今回の

課題に迫っているのは門馬さん。三浦さんは伊達市の高齢者が元気に暮らせるような街づくりをと提案しています。中学生部門は、「弟に元気をあたえる傘踊り」（伊達中二年 鈴木もえ）、「支え合いとは」（月館中一年 鈴木遙天）、「伊達市の魅力を生かすために」（梁川中三年 田巻彩）、「地域で支え合うこと」（伊達中三年 高橋凱翔）の四作品です。いずれも中学生らしい切り口で、家族のつながりや人々の協力し合う姿を具体的にとらえ、高齢化社会や将来の地域づくりの問題について前向きに考えている作品です。

最後に、佳作となった八つの作品ですが、小学生部門は、「当たり前のことをやる」（小手小六年 羽賀美月）、「伊達市の魅力を世界へと」（石田小六年 佐藤琳）、「伊達市、最高！」（伊達小五年 吉田蓮）、「支え合う月館の人々」（月館小六年 半澤璃子）の四つの作品。あいさつや相手を思いやる心のこと、支え合いの輪を自分の地域から徐々に広げていきたいこと、世代を越えた交流を大切にしたいことなど、小学生らしい目と心で人々の生活や暮らし方について思いをつづっています。中学生部門は、「優しさ溢れる町」（月館中三年 平林冬羽）、「温かい町伊達市」（霊山中三年 菅野優空）、「私たちにできること」（松陽中三年 清野琴未）、「祭りで広がる信頼」（月館中二年 齋藤紅友空）の四作品です。日ごろから笑顔でコミュニケーションすることを実践したい、地域の行事や祭りなどを通して人々が支え合うことで絆を深めたいなど、年々高齢化が進む地域社会の暮らしの中で感じていることを中学生の視点からとらえたもので

す。

以上、それぞれの受賞作品について触れてきましたが、どの作品も今回のテーマについて自分たちの身近な問題として、出来事の一つ一つをしっかりと見つめて文章にまとめているのが印象的でした。施設の訪問や職場体験などをはじめ、実際に体験したり経験したりしたことを自分の目で具体的にとらえ、自分の頭でよく整理し、そこから問題を少しずつ広めたり深めたりしているところが大切なことです。今後も生活の中で感じたり考えたりしたこと、あるいは、体験的活動等で感じた問題や疑問点などについて、ふだんから気軽に文章を書く習慣を身につけるようにしてください。

来年度は、市民憲章の第四文「きずきましよう 学ぶ心とゆたかな文化を」ということがテーマになります。中心にしたい話題を絞りながら、書き出しや文章の結び方、段落構成や文章の展開のしかた、スピード感のある書き方や言葉の選び方などに留意し、自分の個性を生かした文章をたくさん書いてほしいと思います。



伊達市民憲章

～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一 つなぎましょう

世代の絆とたしかな信頼を

一 そだてましょう

支えあいと思いやりの気持ちを

一 きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

一 めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを



市民憲章の解説

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達 織りなす未来ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「くましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。

一 まもりましょう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

一 つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を

世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

一 そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

一 きずきましょう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立つて行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

一 めざしましょう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。



編集発行：福島県伊達市総務部総務課
令和2年1月